

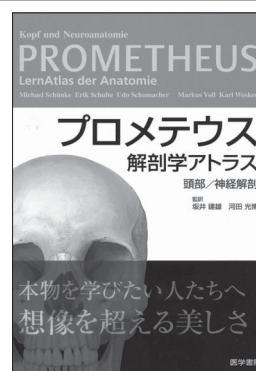


坂井 建雄, 河田 光博●監訳

『プロメテウス解剖学アトラス 頭部／神経解剖』

書評者

渡辺 雅彦（北大大学院教授・分子神経解剖学）



『プロメテウス解剖学アトラス』の第3巻「頭部／神経解剖」は、「解剖学総論／運動器系」, 「頸部／胸部／腹部／骨盤部」に続く最終巻である。本書を手にとると、つい引き込まれてページをめくりながら読んでしまう。その理由を分析してみた。

まず第1に、本書の図の1つ1つが実に美しいことである。これまでの解剖学図譜で行われてきたような、実物を精巧に再現する図や、できるだけ多くの構造体を網羅するカラフルな図や、理解を助けるために単純化した模式図とも異なり、プロメテウスならではのユニークな図が満載されている。例えば、最初の頭蓋の章では、約40頁に百数十点の頭蓋の全体や各部の図が登場する。そこには、まるで写真のような精巧さで頭蓋底や頭蓋の断面が描かれた図が登場する一方、その隣には各頭蓋骨をパステルカラーで色分けされた図も提示され、個々の頭蓋骨がどのように頭蓋を構成しているのかがよくわかる。頭部の断面解剖では、CTやMRI画像の理解を意図した図も豊富に提供されている。さらに、これ

らの図が、著者らの意思と目的を具現する手段として作成されている。例えば、脳神経や眼窩領域の部分では、理解させたい部分の表情筋や骨を順次切り取った図が提示され、脳神経や血管の走行経路と分布が理解できる。剖出を行いながらその先の構造体を明らかにしていく、ちょうど解剖学実習を行っているような感覚になる。

第2は、その構造の特徴と働きを理解するための説明が、図の1つ1つに与えられていることである。しかも、従来の系統的な解剖学書とは異なり、本書の説明は与えられた図に関連した事項を中心に構成され、読み進めていると結果的に重要なポイントがすべて網羅されるようにできている。まさに、優れた解剖学の講義を聞いたような感覚になる。例えば、脳室系の章では、脳室系の全体像と隣接する重要な構造の説明から始まり、そのどこで脳脊髄液が作られ、循環し、吸収されるのかが、14点の図とその説明により展開していく。著者らは、本書の目標が「学生にとって優れた設計の学習環境を作り上げること」と「説明の少ないある

いは説明なしの図を提供することはない」を、その序文に書いている。本書には、著者らの意気込みと意図が染み渡っている。

第3に、本書は、解剖学を基盤としながらも医学全体を視野に入れた教科書である点である。脳の各部位の生理機能や機能障害、ウィリス動脈輪などの変異、外眼筋や神経伝導路などの機能解剖学、脳浮腫の際に起こる脳ヘルニア、診察や検査など臨床医学に関連した解剖学的事項など、人体の構造に関連した生理学的、病理学的、臨床的な側面まで包含している。

したがって、本書を、解剖学の講義実習のテキストにとどまらず、他の基礎医学や臨床医学に進んでからさらに紐解く座右の医学書として推薦したい。

A4変型 頁432 2009年 医学書院刊
定価11,550円（本体11,000円＋税5%）
[ISBN978-4-260-00603-3]